学位論文要約

近代日本における進学行動の定着過程に関する研究

― 学習者の動態把握を中心として ―

小宮山　道夫

博士論文要約

小宮山　道夫

１．論文題目

近代日本における進学行動の定着過程に関する研究―学習者の動態把握を中心として―

２．論文構成（目次）

序章　本研究の課題と方法 6
第１部　医学分野における学校文化の受容過程 15
　第１章　明治期の医師履歴とその分析手法 15
　第２章　資格制度の創設と医師社会の変化 29
　第３章　医学教育の構造変化 64
第２部　高等中学校制度の地域における受容
　第４章　高等普通教育の創出―高等中学校制度の地域における受容― 81
　第５章　高等中学校制度の与えたインパクト 132
第３部　高等中学校生徒の動態
　第６章　高等中学校入学者の分析 172
　第７章　高等中学校生徒の進級動向 197
　第８章　高等中学校生徒の進級 205
終章　本研究の総括と今後の課題 220

３．論文概要

①本研究の課題と対象

1880 年代に政府が主導した新たな教育政策と人々が慣習として持ち合わせてきた学習観や新たな教育要求との間の結節点は如何に形成されたのかということは近代日本の特質を明らかにする上で大きな課題である。明治維新以降 1890 年代に至るまでの近代教育制度の定着過程において、学習者たちがどの様に新たなシステムとして登場した学校という装置を認識し、意義を見いだし、利用しようと考え、受け入れ、馴染んでいったのか、これを著名人の回想録や特殊な事例によって明らかにするのではなく、できる限り規模の大きな学習者の群としてその傾向を捉え、教育政策が人々に受け入れられていく転換点を動的に明らかにしようとするのが本研究であり、1870 年代から 1890 年代にかけて学習者の間にどのような変化が起き、90 年代のアーティキュレーションの確立に繋がったのかを動的・立体的に示すことが本論の目的である。

地域研究によって中央の教育政策が定着していく過程を考察する研究は少なくない。し

かしその多くはこれまで小学校を研究対象としてきた。初等教育は多くの場合本人が主体的に望んで通い始める学校ではない。近代学校制度の受容過程を明らかにするのであれば、少なくとも主体的に学校に通うことを選択するようになる専門教育や上級学校への進学を志向する小学校以上の若者たちの動態こそに注目すべきであろう。

70 年代から 80 年代にかけての学習者の動態を把握するためには、前近代から学びと職業とが直結していた集団であり、いち早く資格制度化と学校組織化が全国各地に進んだ医学教育を例に、歴然たる近代学校である医学校を利用するようになる過程を示す必要があると考えた。また 80 年代から 90 年代にかけての学習者の動態の把握としては、近代以降国家有為の人材として学びと職業とが直結していくことになる上級学校進学に関して、まず地域がその養成システムの導入に対してどの様な対応をとったのかを明らかにし、さらに専門教育の提供や上級学校進学のための教育を提供するように設計された高等中学校で学ぶという中学校令下の近代学校制度に対し、学習者たちが順応していく過程を示す必要があると考え、本論を構想した。

このため本論は 3 部構成とし、第 1 部においては、近代における医師の修業形態の変遷を跡づけた。第 2 部と第 3 部では、中学校令に基づき設けられ、1894 年に高等学校令により改組されるまでの短期間存在した高等中学校を扱い、従来未解明であった地域における同校の制度としての受け入の実態と同校生徒たちの姿とを検証した。

②研究方法

第 1 部は前近代から専門的な職業集団として成立していた医学分野を例に、医師になろうとした者たちがいかに近代以降の医療政策の変化とそれに連動する教育制度を受容し、学校で学ぶという学習文化がいかに定着していったのか、その過程を分析するために医師の履歴書を用いプロソポグラフィ的な分析を中心に行った。

具体的には履歴書に表れる学習歴に着目し、それを漢方と洋方の対立軸と徒弟的修業（経験）と学校を利用する修業（学校）の対立軸の 2 軸 4 象限のマトリックス図を設定し、4 象限をそれぞれ漢方経験形態・漢方学校形態・洋方経験形態・洋方学校形態と表現して分析を行った。このことにより医師となろうとした者たちがこの時期に集団としてどのように修業形態（学習形態）を変容させて近代医学に対応していったのかを動態として示した。

第 2 部は高等中学校の創設に関わる地方の反応について、各県教育史・学校沿革史・各県史・各県議会史・各地郷土史における記述やそれらにおいてこれまで扱われることのなかった史料を可能な限り収集し分析を行うこととした。高等中学校に関連する史料は従来ほとんど見いだされておらず、地域によって残存状況も大きく異なることから、その内容の偏りも激しい。ここでは、第五高等中学校の九州地区、第二高等中学校の東北地区、第四高等中学校の北陸地区について、各地の行政文書や新聞記事などをもとに高等中学校制度という教育政策に対して地方がどのように制度を理解し、それを活用しようとしたのか、

あるいはしなかったのかを明らかにすることを目指した。その際、①県会における高等中学校制度に対する認識と評価、②県会または尋常中学校関係者による尋常中学校と高等中学校の接続関係に関する認識と評価、③区域内の府県関係者による相談会における財政負担問題への反応の 3 点に特に注目して分析を行うこととした。それらを総合して地方が中央の政策にどう対応したのかを中等教育の再編の動きとともに示すことを心がけた。

第 3 部は第二高等中学校と第四高等中学校の史料を活用し数量的分析を行うことによって高等中学校生徒の入学・進級についての実態を明らかにした。更には従来からある統計データを元にその数値の裏に隠されているデータを掘り起こすことに注意を払い、どういった者たちが高等中学校を進学先として選択し、適応していったのかを示すことに努めた。

③結論

全 8 章での考察を通じ、次のことが明らかとなった。若者の将来に直結する専門教育の分野においては明治政府の諸政策が打ち出される以前から社会環境の変化に応じて学習形態の模索が始まっていた。効率的な学びを求めて人為的組織的な学習形態が求められ、それに応じる学校が形成されていった。二重目的をもって森有礼によって説明された高等中学校もまた、そこへ至る効率的な学びの場として用意された訳であるが、その制度を設計した政府、それを受け入れる地方、そしてそこに実際に学ぶ若者たちの間にはそれぞれ別の思惑がうずまいていた。ただ少なくとも「実用」性を目的としていた一点においては共通しており、高等中学校は大学進学のための予備教育機能が重視され肥大化して高等学校制度へと変化していくのである。いわば高等中学校制度はそれまで全国各地に叢生し独自に発達していた中等・高等・専門教育を一旦まとめて括り込めるために用意され、教育水準を指定することによってその収斂化・高度化をめざすための篩のような機能を発揮した。その意味では学制・教育令・第二次教育令と続いた 1870 年代の教育政策の動揺から 86 年の森文政期の諸学校令による公教育制度の確立といったこれまでの教育史観は改められねばなるまい。1880 年代は 90 年代の帝国憲法下での天皇制国家の成立とそこで行われた教育に至るための政府の主導する新たな教育政策と人々が慣習として持ち合わせてきた学習観や新たな教育要求との間の結節点を生み出した時代であった。民間の教育需要と政府の教育供給、中央の施策と地方の解釈といった 70 年代の教育政策の模索の中で生み出されていった様々な混乱を収拾整理する時期であったが、同時に新たに生み出されつつあった日本人が飼い慣らされた主体性を獲得する時代であった。政府が用意した枠組みのなかで人々は矮小化された主体性を発揮し、近世社会とはまた異なった新たな分、分限を獲得した。本論の意義は明治前期の学習者たちが学校制度を学習環境として重視するようになっていったことを動態として跡づけ、近代学校システムの中に取り込まれていく姿を描き出し、従来は史料的な制約から正面から取り上げられることのなかった高等中学校を中心に分析することにより教育史上における 1880 年代の持つ意味と学校間接続の形成過程、そして人々と学校システムとの接続過程を示した点にある。